

ぎょうせきづか 経石塚 — 大淀 —

中大淀に、迎接寺こうじょうじという明和町でもっとも古いお寺があります。
寛永二年かんえいに建てられたという本堂は、その高さが民家の三倍ちかくもあるという程、高い立派な格調あるお寺です。

葵あおいの紋章もんしょうのある門をくぐると、左手に「高田中興上人たか だ ちゅうこうしやうにん経石塚ぎょうせきづか」
という石碑があります。

このお寺の住職じゆうしやくである花山けんしやう顕勝さん自ら、渋いお茶を入れて下さって、こんな昔話をして下さいました。



むかし、むかしのことです。

ある産婦が、急に苦しみ道端で亡くなってしまいました。どこの誰だかわからなかったので、村人たちが、その産婦を手厚く葬りました。

けれども、どうした訳か、毎晩毎晩火の玉がでるようになったのです。

村の人たちはびっくりして、

「おそろしいのう。」

「気味が悪い。」

と言って外に出ようとしません。

一番こまったのが漁師です。夜中に起きて漁に行かなければならないのに、こわくて誰も出ようとしません。

村の人たちは、生活にもこまってしまいました。

そこへ、伊勢神宮へ参詣する、高田本山専修寺の真恵上人というお方が通りかかりました。

村人たちが、すっかりこまっている様子を見て、
「私の力で。」

と小石を拾い経文を書いてそれを埋め塚を築きました。

そうして追善供養をして下さったおかげで火の玉はでなくなりました。

村の人たちに笑顔がもどりました。そしてこの塚のことを、経石塚と呼ぶようになったのです。

その時、真恵上人がよんだという

一なき人の心の霧も晴れぬべし

松ふく風に月のさやけき一

という歌が今に伝えられています。



現在の迎接寺

キーワード：みんわ、大淀、迎接寺